

『医学資料の整理と利用——病院図書室 マニュアル——』の作成について

浜口 恵子 (高槻赤十字病院)

首藤 佳子 (星ヶ丘厚生年金病院)

安達 貴美子 (西淀病院)

小田中 徹也 (国立京都病院)

I マニュアル作成の目的

今日、医学情報は増加する一方で、その形態も多様になってきています。病院における図書室は、医学情報の増加および医療内容の複雑化・専門化・高度化に伴い、その必要性が近年、徐々に認識されてきました。

図1は、専門図書館の利用の流れを示したものです。これを見ればわかるように、専門

図書館では“閲覧サービス”“貸出サービス”だけではなく、“文献検索サービス”“文献相互利用サービス”など、種々のサービスを行っています。

病院においても、現在の臨床や研究を進めていく上では、病院図書室がこれらの図書館サービスを行うことが必要になってきました。昭和49年秋、それに対応するために設立された近畿病院図書室協議会（以下、「病図協」と略す）も、早や10周年を迎えました。この間、様々な活動を展開し、病図協の催す研修会も回を重ねてきました。その中において、図書室担当者の基本的な実務知識修得への潜在的な要求というものは、絶えず問題になり、また考えていかねばならない課題の1つでした。そして、担当者の業務レベルの標準化、資質の向上などを図るための、病院図書室の業務指針となるものの必要性を痛切に感じておりました。

病図協は、このような現状に立脚して、病院図書室の機能について実務を中心に編集した、入門書ともなり得る「病院図書室マニュアル」を作り、病図協10年のまとめとすることにしました。そして、3年の月日を費し、様々な問題にぶつかりながらも、ようやくこの4月に『医学資料の整理と利用——病院図書室マニュアル——』の書名で、トシマ参考図書より発行される運びとなりました。

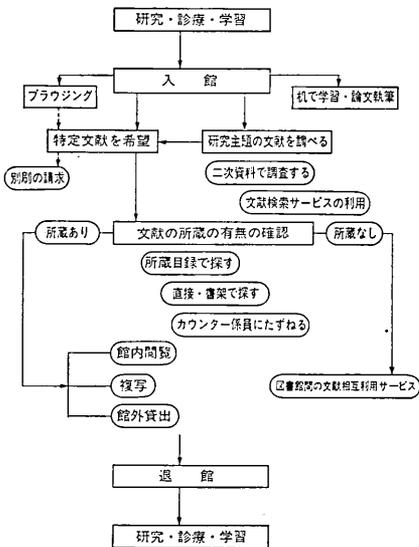


図1 図書館の利用

引用：『医学文献の探しかた；医学研究者のためのわかりやすいガイド』
東京、日本医書出版協会 1983 p.60

本書の目的は、病院図書室の機能を実務を通して明確にし、統一的に理解することにあります。これにより、ひいては図書館協力活動をも、さらに向上させていけると考えております。

II 内 容 紹 介

当初は、書名を『病院図書室マニュアル——小医学図書館の機能とその実務——』と予定していましたが、広く医学資料に接する人々にも利用され得るものであるとの考えから、前述のように『医学資料の整理と利用——病院図書室マニュアル——』としました。

本書では、実務を効果的に理解するために、叙述の順序を業務の流れに即して配列しました。また、第1章から第8章までの本編の後に、資料編を付けました。図2が、本書の内容構成です。

(書名)	医学資料の整理と利用
(副書名)	一病院図書室マニュアル
(内容構成)	第1章 病院と図書室
	第2章 資料および選択と収書
	第3章 資料の整理(単行書)
	第4章 資料の整理(逐次刊行物)
	第5章 貸出と閲覧
	第6章 レファレンス・サービス
	第7章 相互貸借
	第8章 病院図書室のマネージメント
	資 料 編
	I 医学基本図書目録
	和 書 378冊
	洋 書 489冊
	合 計 867冊
	II 医学・病院図書室関係資料目録
	単行書 90冊
	雑 誌 29種
	主題別文献目録 146件
	教育研修機関一覧 28機関
	III 病院図書室設備
	レイアウト(図版) 6機関
	備 品(写真)
図2	内 容 構 成

次に、各章について簡単に説明します。

第1章は、病院図書室の要旨を把握するための概論にあたり、病院図書室の現状と、整えていかなければならない要点を述べています。また、ここでは、いわゆる図書館の相互協力活動について、病図協の活動を具体的に紹介しました。

第2章では、病院図書室の対象とする資料について説明し、その選択と収集の実務に入ります。即ち、病院図書室では、どのような資料を、どのような方法で収集するのかが示されています。第3章、第4章は、資料の組織論にあたります。収集した資料をどのように整理し、保管していくのかを、詳しく述べています。第3章「単行書の整理」における目録法や分類法は、図書館実務の中でも統一化していくべきものでしょう。第4章「逐次刊行物の整理」も、医学情報における雑誌の資料的価値から考えますと、その受入や保存法などは日常業務の中心をなしていると言えます。

そして、このように収集、整理された資料は、第5章、第6章の利用サービスにおいて、直接利用者と結びつきます。ここでは、その図書室の実務上の工夫、図書館員の個性や力量によって、サービス内容が大きく左右されるので、事例を多く用い、より具体的に説明しています。

第7章「相互貸借」は、本来、レファレンス・サービスの中に含まれる実務です。しかしながら、病院図書室での重要性、実務上要求される正確さの確保から、独立して章を設け、ここで詳しく述べています。

最後の第8章は、病院図書室の経営についてまとめ、それが病院全体の管理・運営とどのように関わるかについて触れています。

以上の各章は、それぞれ内容の性格上、あるいは実務的分量から、具体性の多いものと少ないものがあります。また、多様な方法の中から1つ、または2つに集約して説明し

た場合と、それぞれの図書室に取り入れていく材料として多くを並列した場合があります。したがって、各実務を実際に進めていく上では、読者の取捨選択に委ねられている部分もあります。

次に、資料編についてですが、Ⅰの「医学基本図書目録」は、いわゆる定評ある成書、もしくは教科書と呼ばれている資料です。洋書については5種類、和書については6種類の書誌類をもとに基礎リストを作り、15機関の各分野の専門家にアンケートを依頼し、集計した結果です。図3は、アンケートをお願いした病院です。Ⅱでは、医学・病院図書室関係の資料を網羅的に収録し、さらに、教育研修機関や団体もリスト・アップしました。また、Ⅲでは、病院図書室の設備について、図版と写真を中心にまとめました。これらは、それぞれ利用価値の高い資料集であると思われま

す。以上が、本書の内容構成の概略です。

星ヶ丘厚生年金病院
国立京都病院
国立大阪病院
倉敷中央病院
京都第一赤十字病院
京都市立病院
九州厚生年金病院
大阪府立成人病センター
大阪回生病院
大阪赤十字病院
大津赤十字病院
社会保険広島市民病院
島根県立中央病院
住友病院
天理よろづ相談所病院

(ABC順)

図3 アンケート依頼先病院

Ⅲ 経過報告

次に、編集経過について報告します。

昭和56年11月13日、56年度第4回幹事会において、「病院図書室マニュアル」を病図協で編集することが決議されました。昭和57年1月21日第5回幹事会で編集委員4名が選出され、2月4日には、第1回編集会議が開かれました。4月の第3回編集会議において、内容構成と執筆分担が決まり、監修も慶応義塾大学の津田良成教授にお願いすることになりました。この間、内外の資料を参考にして、当マニュアルの目的や内容、また、表現法などについて検討を重ねました。

57年5月に入ってからは、各執筆者から、それぞれの担当分野の内容構成や叙述方法についての考え方や構想を提出していただき、編集委員と執筆者との合同編集会議を開きました。

各会員図書室へは、採用している分類法や目録法、実務に用いている様式、スタッフ・マニュアルの有無、さらには、当マニュアルへの要望などについてアンケート調査をしました。また、病院図書室だけではなく、医学図書館からも利用規定や案内などの見本を提供していただきました。

このように準備作業を進めていく過程において、編集委員と執筆者との個々の打ち合わせを幾度となく行い、調整を図って行きました。

当初の計画では、57年8月末脱稿、秋には編集・整理作業を終え、12月末には版元へ完成原稿を引き渡す予定でした。しかしながら、夏の間作業が進まず、また、8月下旬には日本病院会全国図書室研究会を病図協との共催で大阪において開催したため執筆状況が大きく遅れる事態となり、作業計画も大幅に修正しなければならなくなりました。この段階で、編集委員は、各章の執筆経過を注視していくと共に、資料編の作成作業を開始しました。

9月早々、津田先生宅へ編集委員2名と出版者側から1名が出向き、マニュアル発行の趣旨や内容構成について説明し、監修をお願いしました。この時に、適切な指導や助言をいただき、マニュアルの基本的な性格づけがなされました。

57年秋に入ってから、草稿が次第にできあがってきて、編集委員と執筆者との間で、内容、表現、他章との調整など、検討を重ねて行きました。資料編の作成にはアンケート調査を行い、内容を吟味しました。フォームの検討・統一化、図版の整理等も行いました。このような作業は、結局、58年春まで続きました。また、著作権の関係上、病図協と版元トシマ参考図書との間で、明文化された契約も交わすことになりました。

その後、一部の章については、止むなく執筆者の変更もありましたが、58年7月初めによく草稿が出揃ったので、監修者の津田先生に原稿を送付し、監修をお願いしました。しかし、これは、用語、文体の統一がとれておらず、送り仮名や用字に不適当なものもある状態でありました。

この原稿をもとに、58年8月24日、大阪での第23回編集会議において、津田先生から各章にわたり詳細なコメントや提案をいただき、それに沿って再び原稿を書き直していく作業に入りました。さらに、夏から秋にかけて図版の写真撮影作業、各章についての監修に基づく編集委員と執筆者との意見交換などを経て、ようやく58年11月に最終原稿を版元へ引き渡しました。

12月からは索引の準備に入り、翌59年1月、索引作業と共に校正作業にも着手しました。1月末の第26回編集会議で、校正、索引作業を済ませ、59年2月中旬に全作業を終えました。そして、59年4月20日発行されるに至りました。

編集経過の概略

- 56.11.13 56年度第4回幹事会において、「病院図書室マニュアル」編集を決議。
- 57. 1.21 56年度第5回幹事会において、編集委員選出。編集方針、スケジュールの概要について検討。
- 57. 2. 4 第1回編集会議。
- 57. 4. 3 第3回編集会議。内容構成と執筆分担を決定。監修は津田先生に依頼することとなる。
- 57. 5.29 第5回編集会議。執筆者と共に、各章の項目、執筆方法、スケジュール等について検討。
- 57. 7.29 第7回編集会議。内容構成についての討議。執筆上での打ち合わせ。
- 57. 9. 2 慶応義塾大学の津田良成教授に監修を依頼。
- 57.秋～ 資料編の作業開始。草稿の検討。
- 58. 1.17 版元トシマ参考図書と契約書を交わす。
- 58.春 資料編の編集完了。
フォームの検討、統一化。
図版の整理。
- 58. 7 草稿が集まる。監修者津田先生に原稿送付。
- 58. 8.24 第23回編集会議。津田先生から各章にわたり詳細なコメントを受ける。
- 58.夏～秋 図版の写真撮影作業。
原稿書き直し作業。
- 58.11 最終原稿を版元へ。
- 58.12 索引作業準備。
- 59. 1 索引作業。校正作業。
- 59. 2 全作業終了。
- 59. 4.20 発行

IV 考 察

前述のような経過によって、マニュアルの編集、執筆を行ってきましたが、ここで若干の考察を述べ、今後に生かして行きたいと思えます。まず、病院図書室に関するまとまったテキスト、あるいはマニュアルが、日本においてこれまでになく、当マニュアルが最初のものであるということに重要な意義があると思えます。これによって、病院図書室像をその規模、役割、機能の面から、さらには図書室間の協力関係の面からも示すことができたと考えられます。

したがって、説明の中心は、現状に即した実務ではありますが、病院図書室の機能を明確にしたということは、結果として1つのスタンダードを示したと言えるのではないかと思われます。もちろん、不備な面も多く、今後の課題として解決して行かなければならない側面はありますが、それぞれの図書室の点検指針として役立つ内容であると考えております。

次に、反省点として、編集委員や執筆者が力量不足であったこと、日常業務や他の病図協活動と両立させていかなければならないことを軽視して計画を立てていたことがあげられます。したがって、編集方針が徹底せず、また、各章毎の内容も時間的に十分検討し尽くせなかったように思われます。その結果、

内容や表現において、それぞれの章の主題上止むを得ぬ面もありますが、全体的な統一が欠如したきらいがあります。

さらに、統一化していくべき実務として、例えば、目録法や分類法、貸出方法、選択指針、実務上のフォームなどは、より整備して提示していったのではないかと考えられます。

しかしながら、当マニュアルで一応の素材を示し、読者の方々からご批判やご指導を受け、それらを踏まえて、次の機会により良いマニュアルに再生させるのも1つの方法ではないかと考えております。

V 謝 辞

最後に、暖かいご指導と励ましをいただきました慶応義塾大学教授の津田良成先生、アンケート調査および資料の提供にご協力下さいました諸機関には、この紙面をお借りしまして、厚くお礼を申し上げます。また、版元であるトシマ参考図書の大嶋氏には、ひとかたならぬお世話になり、また、原稿提出が遅れるなど、ご迷惑をおかけしました。ここに改めて、感謝いたします。マニュアル作成についての報告を終わるにあたり、皆様のご協力の賜物であるこの『医学資料の整理と利用——病院図書室マニュアル——』が、より多くの方々に、広く利用されることを願いたします。